

第五章 近世（大和世）

第一節 島津氏の琉球入り

慶長十四年（一六〇九）、島津氏が琉球を侵略した事件を、薩摩侵入、島津入り、慶長の役、征縄の役、琉球征伐、島津の琉球入りなどと呼んでいる。日本の封建的統一運動の一環とみて島津進入と評価する見解も一方にはある。

幕府統一政権の対明（中国）政策は、豊臣秀吉の第一次朝鮮侵略（一五九二年の文禄の役）挫折後、それまでの唐人から勘合（単に公貿易の意味）要求に転換するのであるが、薩摩藩主島津氏は室町時代から琉球貿易の有利なことを知り、これを独占しようと考えていた。けれども幕府はそれを許さないで島津氏に監理を命じた。

島津氏の琉球入り（一六〇九年）より九十三年前の永正十三年（一五一六）、備中の三宅和泉守国秀が琉球征伐を企てたのを幕府が知り、島津氏に命じ三宅氏を山川港（一説には坊ノ津）で取り押さえた事件があった。

善隣友邦と考え、決して配下とは考えていなかったのである。

島津氏の琉球入りは、すでに十四、五年も前の秀吉の征韓時代に始まっている。

文禄元年（一五九二）の征韓役に当たり、島津氏は秀吉から一万五千人の出兵を命ぜられたが、その一部を琉球に負担させるつもりで、差し当たりその半数の七千五百人に対する十カ月分の食糧を出すか、それではなければ大島以下五島をゆずり渡すように、との難題を持ちかけてきたのである。そのころの一人分の軍糧は一日分五合の割合であったから、七千五百人の十カ月分では、一万一千二百五十石の量になるので、琉球にとっては大きな負担である。ちょうどそのころ琉球では、冠船（冊封使の乗船）迎接の準備中であつたのでひとかたならず当惑し、群臣を集めて協議した。このとき三司官（法司ともいい三人の重職）謝名親方が顔色を変えて激昂し反対を唱え、拒否することに決した。「喜安日記」にこのとき「勅使迎えの事、金銀米銭、山の如く霞の如く積みたりとも、なお飽き足らじ、いかにもなり難しと憚るところなう申されけり」とある。

それより六十八年後の天正十二年（一五八四）、因州の亀井武蔵守茲矩が琉球征伐の允許を秀吉に請うたので、秀吉は即座に腰の扇子を取り、それに「亀井琉球守」と書いて渡したことがある。この扇子は「亀井武蔵守」が船中に遺失したが、拾い上げられて今日に伝わっているという。ところが亀井氏の琉球征伐は征韓の役（文禄の役）のため沙汰やみに終わった。

それまでの琉球と薩摩の関係は善隣友邦としての間柄であり、兄弟としての関係であつたことは、永正五年（一五〇八）島津忠治から琉球王あての書簡に「抑々我國貴國を以て善隣となす事、他國の比量すべきものなし。云々」とあり、また元龜元年（一五七〇）島津義久から中山王あての書簡には「貴國は陋邦と鯨海千里を隔つと雖、往昔より昆弟の約あり」の文句があり、天正十二年（一五八四）三司官から鹿兒島奉行衆へあてた書簡に「今より以後、又旧規にたがわず、隣好を修むべき事いねがう所なり」とあることから、善隣友邦と考えていたことがわかる。

また、慶長以前の琉球王に対するあて名にも、殿下陛下・階下などの敬語があるくらいで、島津氏は琉球を得て征討の軍を催すことになったのである。

島津氏が琉球を征伐するに至った原因は一朝一夕のことではなかったが、その直接の原因として「琉球軍記」（中山国並大島諸島攻取日記）には、次のように記されている。

「慶長征縄役前琉球国尚寧王の臣に謝名親方（鄭廻）と池城親方との二人あり。この二人七島の船頭に依頼して曰く、国主尚寧王近来銀子別けて差迫り候に付き大和の殿様（島津氏）へ御訴へ申上げ、銀子二百五十貫目御拝借仕りたしと。この時七島の船頭は右兩人の親方と相談の上、利銀五割に取り定め、島津氏に右の旨訴へ、願いの通り銀子二百五十貫目拝借し、琉球国へ下り右兩人の親方に渡したり。之より毎年利米として五枚帆の船に積み登り上納せりと雖も、其後利米を納めざるに至りしかば、其故を詰問せしに謝名親方曰く、右銀子の儀は年々米にて元崩しにて返し只今出入なく返済せりと。因て諸船頭も迷惑に思い、次に池城親方に問いに同氏は曰く、謝名親方斯くと申せば予も亦如何とも致し難し、一応謝名親方へも其旨相達し相談すべしと。斯くて事再三に及

べども相変らず斯る非道の行ありければ、船頭共遂に決議相談の上急に薩州へ登り、島津氏へ此旨申上げしに、島津氏之を聞き入れ、再度使者を琉球に遣わせしも謝名親方蔑ろに散々もてなせしかば、遂に事征伐に及びしなりと。」

(注) 謝名親方は、唐名を鄭廻といつて明の帰化人三十三六歳の裔で、那覇久米村の胡城家の先祖である。十七歳のとき福州に渡り、多年南京の国子監(明の大学)に学び、帰国後講解師として子弟を教え、数回進貢使人として入閩し、功によって浦添間切謝名の総地頭に任ぜられ謝名親方と称し、尚寧王時代、慶長十一年(一六〇七)三司官に拔擢された人で、大小の政治皆彼によって決せられるほどであった。唐榮(久米村)出身で三司官になったのはこの人が最初である。

極端な親明派の頭目で中国思想の代表者であった。「喜安日記」に「謝名は六尺ばかりの色黒き男なり」とあるが、身長六尺ばかりで色黒く容貌魁偉しかも傲骨の士で終始一貫王の信認を得ていた。薩摩でもこの人を手こわい者として評判が高かったとみえ、

捕虜となつて薩摩に上陸したときには「音に聞ゆる謝名見んとて見物の入市をなした」と「喜安日記」に見える。鹿児島で斬首の刑に処せられた。本土側からいえば逆賊であるが、琉球側からいえば無二の忠臣であった。

これが琉球征伐の直接の原因であつたろうが、この征戦の由来するところはきわめて遠かつた。

琉球は察度王が明主朱元璋の招諭に応じ、明に入貢しその子武寧王のときから支那の勅使冊封を受ける例を開いたが、室町幕府の末から徳川幕府の初めにかけて、琉球が礼を失したことは一再にとどまらなかつた。もとよりわが国は琉球が支那の冊封を受けて、彼に入貢している事実を知らないのではなく、よく知つていて見逃がしてはいたものの、それかといつて琉球を支那の略奪に任せる意志はなく、薩州島津氏をしてこれを監理せしめたのである。しかるに友邦としての実を尽くさず、みだりに礼を失したのであるから憤怒を招くに至つたのも偶然ではない。たとえその間に情状の察すべきものがあつたにしても、つまりは責めなきを得ないのである。

琉球はもと薩州に属し、古くは島津氏に対して納貢時をたがえず、慶弔にも一々使いを派して礼を失わなかつたのが、室町幕府の末葉すなわち戦国時代になつて、日本国内の騒乱に乗じて貢を違えて、礼を失したことが一再でなかつた。

次に琉球入りの原因になつたであろう罪状を列举してみよう。

1 天正三年(一五七三)、島津家の使、僧雪岑が琉球に致るや、尚永王これを持つことはなほだ倨傲、三司官らまた館に來りて慰勞せず、雪岑をして憤然帰国せしめたこと。

2 秀吉の朝鮮征伐を起すや、琉球に説き肥前名護屋に來り謁すべき旨申し遣わしたにもかかわらず、秀吉に対し一言の回報にも及ばずして、侍臣謝名親方鄭廻を明に遣わし、かえつて日本がまさに入冠せんとすることを明に告げしめたこと。

3 征韓役に際し、島津氏は使を琉球に遣わして、七千五百人の十カ月分糧食を肥前の陣屋に輪次せしめんとしたが、琉球王尚寧はかえつて暴令と疑い、窮国の疲民兵賦償出の途なしとの理由の下にこれを拒絶したこ

と。

4 爾来尚寧王は島津氏に怨恨を抱き、しきりに好を明国に通じて、本土と疎遠になつたこと。

5 慶長七年同八年琉球人が奥州ならびに肥前平戸に漂着した時、これをその本国琉球に護送したが、彼等として謝意を表さなかつたこと。

6 島津氏から徳川氏の創業を慶賀するよう、尚寧王に忠告したが、彼はこれに応じなかつたこと。

7 慶長九年二月薩摩から一書を贈り、年来の無状を詰問して來聘せしめようとしたが、尚寧王頑として耳をかさず、翌年明の冊封を受けてからはその力をたのみていよいよ島津に疎遠となつたこと。

8 徳川氏が明と互市を開く目的をもつて、琉球を介してその媒たらしめようとしたとき、三司官鄭廻をしてこれを拒絶せしめたこと。

9 慶長十二年島津家久は童雲、雪岑の二僧および島原宗安らを琉球に遣わし、速やかに駿府に來聘すべき旨を諭さしめたが、彼断固として応ぜず、かえつて使節を謗辱したこ

かくのごとく島津氏に疎情であったばかりでなく、ついに薩摩からの使節を侮辱するに至ったので、島津氏ももはや黙視することはできなくなつたのである。

しかしこれは薩摩側からの一方的言い分であつて、琉球側から言えば、たとえ弱小国とはいえ純然たる独立国であり、少なくとも慶長までは主徒の關係はなかつたのだから、一々薩摩の命令に盲従する義務はなかつた。

薩摩であつてもまんざらこれを知らなかつたわけではなく、島津氏の来翰にも「往昔より昆弟の約あり」とあるように、まったく対等の交際をしていたことは、当時の往復文書によつて見ても明らかである。しかるにこれを知りながら、あえて口実を設けて征琉の挙に出るのは、隠れた意図があり、琉球を介して対支貿易の巨利を独占せんがためであつた。

薩藩としては、すでに朝鮮貿易が九州の他の諸藩に先手を打たれて容易に手出しができなかつたので、せめて琉球を対支密貿易の拠点として、その利益を独占することが多年の宿望であつた。琉球征伐もこの宿望から発した予定の行動であつた。聘問の礼を失したとか、借金の滞納、権臣謝名親方の横暴、使節の侮辱とかいうことは

いたらしく、すでに同年九月六日には「琉球渡海の軍衆御法度之条々」という布達まで発して、

堂、宮、寺等荒すまじき事

無罪者殺害一切停止たるべき事

町人百姓之類差而取るまじき事

などを訓戒している。かくて明くれば慶長十四年の春、いよいよ琉球入りの幕は切つて落とされたのである。

〔琉球入り〕

島津家久は策をめぐらし、津令十三草を定め、樺山権左衛門尉久高を総大将とし、平田太郎左衛門尉増宗を副将として、諸勢三千余名は五反帆の兵船百余艘に分乗し、慶長十四年二月二十一日鹿児島を船出して、山川港に勢ぞろいしたうえで、七島の楯師二十四人の水先案内によつて、三月四日威風堂々と出発した。

この軍勢は戦略上からいって、まず琉球の属島たる大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島を討伐する必要があつた。ところがたまたま七島灘で難風に遭い、衆船散乱して大島の諸処に漂着したが、樺山久高大将塔乗の船および七島船四艘計五艘約百五十名は三月七日笠利間切津代港に着いた。

単なる口実である。真の原因は支那との密貿易にあつたことは、その後の薩藩の政策によつて裏書きされている。琉球に対しても王国としての飾りには手をつけず、その制度風俗は旧来のままに存置して、もっぱら実質的の商利を搾取するをもつて賢明な政策としたのである。

〔琉球入りの準備〕

薩摩ではすでに侮辱をこうむる前、一度は琉球を討つてこれを懲らす必要を認めていたから、慶長十年七月に本田親貞を駿府に遣わして、琉球を討たんことを幕府に請わしめたことがある。しかるに徳川家康は今一度使を遣わして来聘を説き、それでもなお聞かなかつたらいいよ征討の軍を發せよとの沙汰があつた。それで一時猶予したが、翌十一年六月島津家久が徳川家康に伏見城で謁見して、「琉球近年懈怠致候、殊更権現様（家康）へ御礼申上之旨使礼を以て申付候得共領掌致さず候間、人衆を差越し退治可致云々」の旨を山口直友から言上せしむるに至つて、家康もこれを許したというから、慶長十四年の琉球入りの準備はすでにその数年前から着手していたことが分かる。

そしてこの準備は慶長十三年の秋にはもはや整頓して笠利の大親真牛は三千人を率いさくを海岸に設けて防戦大いに努めたが、薩船中から火器（鉄砲）を連発するに及んで、土民これに対する武器の備えなく退却した。薩軍上陸し大親を擒にしたので、頭目を失つた土民は皆降伏するほかはなかつた。

津代港頭の戦に大島勢は大敗を招いたにもかかわらず、名瀬、焼内両地でも各々大親を大将に押し立てて奮戦したが、武器を持たない悲しさに皆薩軍の火器で打ち破られてしまった。当時大島に武器のほとんどなかつたことは事実であるが、琉球でも火器がなかつたので、これがもろくも敗戦した大きな原因であつた。この戦において焼内の大親は最も勇敢に戦い、ついに陣没するに至つた。

焼内の大親があまりに頑強に抵抗したので、薩軍が怒つてこの地を全部焼き払つたため、それ以来焼内と称するに至つたということであるが、この村名がたつたつてその後火災が絶えなかつたというので、大正六年に村名を宇検と改めて今日に至つている。

西間切には副将平田増宗の旗下にその他の軍勢が攻め寄せたので、土民大いに驚き恐れて、最初から戦うに至

らずして皆降伏した。

次に東間切の嘉鉄村へ軍船六十七艘で攻め寄せたが、浅瀬が多く寄り着き場がないので、しばらく港口にとどまっていた。陸上の土民は、戦争は一生の大事だからと、この世のいとまごいにと各々酒宴を催した。それから薩軍を迎え撃とうとした。それからしばらく経って、薩軍は小船でわずかの人数だけで押し寄せたが、村民は最後の酒宴に酔いづれ足腰も立たなくなっていたので、戦う力もなく大親一人を置き去りにして皆逃げ去り、大親はついに捕えられて首を打ち落された。

同じく東間切の伊須村には剛勇の兄弟三人がいたが、次々に斬り倒された。残った土民はことごとく捕えられ、あるいは殺されて戦いは終わった。

これより先、喜界島では、薩軍が大島本島を攻略して軍威大いにふるうと聞いたので、頭領永語（勘樽金）はしよせん勝つ見込みはないと知って、船を仕立てて大島の東間切へ乗り渡り、両大将に謁して恭順の意を表し、ついに島民を兵火の惨害から救った。

〔徳之島秋徳港での奮戦〕

勝ち誇る薩摩勢は再び隊位を整えて、三月二十日、徳

之島秋徳港（今の亀徳）に押し寄せ、百余艘の兵船をもって港内を埋めてしまった。旗艦を中心に前後左右に船列をしき、大将は陣幕を張り巡らした中央の床几に腰掛け、平田以下三千の将卒はいずれも鎧のそでを連れ、冑の星を輝かし、威風海を圧して息詰まるような緊張の気がみなぎり渡った。

早朝よりこのものすごい有り様を見た陸上では、一大事到来とばかり、起きたばかりの島民が浜辺に雲集して上を下への大騒ぎである。このとき船上の一将士は立って大音声に呼ばわった。

「島民共よく承れ、汝等の祖国琉球は先にわが薩摩より借用なせし銀子返済の義務を怠り、剩え無礼の振る舞い多く、中にも謝名親方のごとき、わが使者にはなほだしき侮辱を加えたり。よって捨ておき難く、今回征伐に赴く途中まず道の島を討ち取らんがため来り。すでに大島は異存なく降参せり。汝等も彼に倣つて降れ。もし刃向かはば全島を焼いて土民を皆殺しにせんのみ」

言葉は通じないけれどそれと察して、陸上からは当時三代の島主思弥戸金の死後いまだその後継ぎも決定して

いなかったもので、島主の遺子掟役佐武良兼（幼名思太良兼）が同じく大声張り上げて島言葉で答えた。

「この島は只今大親不在、しかも本国よりいまだ何たる沙汰もなければ、銀子借用の儀も、謝名親方の不都合云々も与り知らず。たとえそれが事実としても、われら臣下の分際も漫りに降参するは主君を蔑にするもの、いかなる攻撃に遭うともただ臣子の分を売せんのみ」

言い終わると同時に群衆は反抗の動作を示したので、船からは猶予なく鉄砲を打ちかけた。佐武良金は弟思良佐金（同じく掟役、幼名坊太兼）と共に命の限り防ぎ戦う決心で、すぐさま島民に下知して応戦に努めた。

佐武良金は身長七尺膂力無双、よく一丈五尺の丸太棒を振り回す剛の者であった。彼は牛皮でしつかり腹を巻いて銃丸を防ぐ身支度を整え、島民を指揮して集めた弓矢その他の狩道具をはじめ、竹槍、天秤棒、山鉾、大斧、鉞、村中の包丁を棒の先に結びつけた種々の武器を擁して海岸に陣を構え、さらに浜と村の間を区切る海岸の絶壁では盛んに粟粥を炊き湯を沸かして、寄らば掛けんと待ち構えつつしきりに敵を誘った。薩摩勢は飛び道

具を持っていたので、離れての戦いは島民勢にとって不利であるから、いろいろな動作で敵を誘い寄せようと努めたのである。

やがて薩摩勢は庄内衆を第一線に押し立て、各船から端舟をおろし一塊になって、潮のごとく島民の屯するまつた中に鉄砲をあげながら殺到してきた。

佐武良金は、わが計画図に当たれりとはかり、にわかにも勇み立って群衆を指揮し、自らは三尋に余る檣の大丸太を取って風車のように振り回し、今しも渚に着いた薩軍を片端から打ち倒せば、これに勢いづいた兄に劣らぬ豪勇の思良佐金以下、島民は思い思いの武器をもって縦横無尽に当たり散らした。その決死の勇のすさまじさは到底槍薙刀の及ぶところできなく、庄内衆数十名は見る間にたたき伏せられ、残る軍勢は浮き足立って我れがちに端舟にのがれ、退却を始めた。掟兄弟はここぞと猿臂を伸ばして、手当たりしだい舟から引きずり出して海中へ投げ込むと、島民はわめき寄ってこれを叩き殺し、あわや庄内衆は皆殺しに遭わん有り様となった。

これを見た大将樺山久高は烈火のごとく怒って各船に一斉射撃を命じた。島民は雨と降る銃丸を右に左に避け

ながら奮戦したが、たまたま渋谷丹後守が進み出て、ねらい定めて放った銃丸は佐武良金の胸元を射通してしまった。彼は怒りの声を張り上げ、

「陸上にて戦う勇氣なく、船より飛道具を放つ卑怯者奴―」

と呼ばわり、大石を取って投げつけ、なおも抵抗を続けたがすでに全身血を浴びているので、人々が無理に家に担ぎ込む間もなく息絶えた。弟思良佐金は、

「棒の先からヒヤ―（火矢）が出て兄を殺した。」

と憤激し、母親や家族を残らず諸田村に逃れさせ、兄に代わって華々しく戦い、重傷を負うて自害した。

大将を失った島民勢はついに敗走したので、薩摩勢は凱歌をあげて秋徳港を発し、三月二十一日沖永良部島へと攻め下った。

秋徳港の戦において島民の戦死者多く、海岸は死屍累累として目も当てられなかったという。一体に徳之島の人は勇猛果敢、反抗心に富み、掟兄弟のほかにも史上幾人かの勇士を出している。

〔沖永良部の戦い〕 「奄美史」による

愈々勝ち誇る薩摩の兵船は、勢い込んで沖永良部島の

足を突っ込むかまたはつまずき倒れて大やけどするだろうと、島民はくさむらや蘇鉄の葉陰や榕樹の上で待ち構えていた。

兵船は夕暮れを待っていていよいよ海岸近くに押し寄せた。浜に上った薩摩勢は無数に並べられたなべの中に、ちよどよい加減に冷えた粟粥が満たされているのを見て大いに喜んだ。今まで耐えていた食欲を急にそそられて、「これは親切な島民が我々をこちそうするのかね」と、半ば感激し、半ば不審に思いながら、我勝ちに鍋に手を突込んで粟粥をすすり始めた。

物陰でこの有り様を見た村人たちは驚きあきれて、これではとてもかなわないと、思い思いに物陰から飛び出して、平伏して降参した。何一つ抵抗もせずに降伏した村人をしり目にかけて、大将樺山久高は声高く呼びわつた。「手向いもせずに降参する馬鹿者共！」。それ以来村の名は馬鹿尻と呼ばれるに至った。

この名は明治二十七年九月十日から明治三十一年八月二十九日までの四カ年間大島島司だった笹森儀助翁が前田正名男爵の名から正名をとって正名と改称し現在に至っている。

南海岸に殺到した。時の島主首里の主（童名思鎌戸）は琉球尚寧王の賀であった。初め島主は、薩軍が大島を討伐したと聞き、左右の者と議して、「わが国の周り岩石多く、船を着くるに不便である。薩軍は必ずこれを捨てて那覇に向かうであろう」と、安心して備えを怠った。しかるに薩船の殺到したときはあたかも満潮時で、海水がみなぎり岩石を没したので、薩船ごとごとく着岸し、士卒は自由に上陸することができた。島主蒼惶なすところを知らず、衆を率い出て降参した。薩将樺山久高は笑って、「一戦も交えずに退き降る馬鹿者共よ」とののしつた。それからこの地を馬鹿尻と呼ぶようになったという。

一説にはまた次のように伝えられている。

武器を持たない島民は敵勢を前にして防戦の協議にふけた。そのうちにだれ言うとなぐ、「粟粥を炊いて、ぶっかけようじゃねえか」と献策した。それは名案だとばかり衆議一決、早速戸ごとに三枚鍋一杯ずつ粟粥を炊き、煮立ったままのものを海岸に持ち出すことになって、間もなくもうもうと湯気の立ち昇る粟粥の鍋は渚から村口まで程よく置き並べられた。ちよど夕まぐれである。

今にも薩軍の兵隊がこの鍋地獄を知らずに押し寄せて、

なお、粟粥を炊いて云々については、「琉球軍記」の徳之島秋徳港でも「家毎に粟の粥たぎらかし大和人の脛をただらさん云々」とあり、首里近くの村落でも粟粥を炊いたという伝承がある。粟の穀霊による悪霊祓いの呪術が広く信じられていたのであろう。

かくて奄美諸島はことごとく薩軍の征服するところとなったのである。

〔首里落城と戦後の処置〕

三月二十四日、薩軍はいよいよ那覇港へ向かったが、港口には鉄鎖を張り、警備を厳にして、容易に近寄ることができなかつた。やむを得ず船を返して、四月一日運天港に上陸した。

琉球は尚真王時代（一四七七一―一五二六）に武具を撤廃してからすでに一世紀を経過していたので、戦いには慣れず、地方には武器がまったくなかつたので、たまたま抵抗する者は山刀や豆打棒を持って出るといった調子であつたから、薩軍の士気はいやが上にも奮い、途中の守備隊を難なく撃破して、破竹の勢いで水陸両方から那覇と首里へ攻め寄せた。

間もなく那覇の久米城を破って、敵將謝名親方鄭廻を

とりこにし、四月五日には首里城下に殺到し、水陸合して総攻撃に移った。激戦数刻、琉軍死力を尽くして防戦大いに努めたが、薩軍の精鋭なる火器の威力には敵すべくもなく、三司官は連署して降を請い、尚寧王も捕らわれた。ここにおいて琉球はまったく平定せられ、四月十三日ついに城下の盟を結び、勝ち誇る薩軍は尚寧王以下百官を人質として、五月十四日那覇を解纜し、凱旋の途についた。

その後種々の経緯を経て、慶長十六年八月九日琉球の処分を決定するとともに、大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島の五島は琉球王国から分割して、薩藩の直轄に編入されたのである。

かくて琉球は自ら招いた災いとは言いながら、薩摩の征服するところとなり、その結果名目だけは琉球王国の形骸を保持することができたが、事実は薩摩の付属国としてその政令を奉じ、以後三百年間まったくその搾取機関となり終わったのである。